

9

太極図・陰陽論と中医理論 ——易経と東洋医学との関わりⅡ——

権藤 寿昭

ごんどう外科胃腸科クリニック

前回の京都市での学会では、「易経と東洋医学との関わり」というタイトルで、易経の基本原理が、大は宇宙から小は人体までの森羅万象の法則を説き、且つ『易経』が儒教の筆頭経典であること、それと伝統医学（東洋医学）との関わり、共通原理の存在について発表した。今回は、その続きの意味を兼ねて易経の重要な基本概念である太極について、それと東洋医学との関わりを中心に話すこととし、本抄録を記載・提出する。まず太極の概念をヴィジュアル化した太極図というのが存在する。この抄録においては図示ということが規則上できないので、この図をご存じない方がイメージするには、韓国国旗（太極旗）を思い浮かべるとよいと思われる。国旗の真ん中に、円形の独特のデザイン（上部赤・下部青の二つ巴）、あれはこの太極図を基にしたものに他ならない。但し国旗では青・赤で色分けされているところは、元の太極図では黒白（それぞれ陰陽を象徴する。）となっている。因みに、その周囲四隅に配置されているのは易経・八卦の内の「乾、離、坎、坤」の四卦である。それはともかく、この基本概念となる“太極”は易経での基礎中の基礎ともいうべき概念で、繫辞上伝にあるように、「易に太極有り、これ両儀を生じ両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず」とあり、これから『易経』の壮大な理論体系が展開されてきた。太極図は陰陽気化の象徴図であり、宇宙の陰陽気化の縮図である。繫辞上伝に「一陰一陽之を道と謂う」とあり、太極図は宇宙万物の元始を強調し、事物発展の根本動力と見做せる。東洋医学の聖典ともいうべき『黄帝内経』は、その基礎医学の定番のテキストとして中医学・漢方医学を学ぶ者にとっての必読書であるが、その中の《素問・陰陽應象大論篇第五》に、「陰陽は、天地の道也。万物の綱紀、変化の父母、生殺の本始、神明の府也。」とあるのは、中医学が『易経』の影響を受けて、事物の発生や発展における陰陽気化の意義を重視することを物語っている。太極図の特徴的な形状“陰陽の象徴である黒白の抱き合う形状。所謂、二つ巴。”は、互いの依存関係を表現しており、前述の《陰陽應象大論》に、更に「陽を重ねれば必ず陰、陰を重ねれば必ず陽。」「寒極まれば熱を生じ、熱極まれば寒を生ず。」「陰は内に在り陽の守り也。陽は外に在り陰の使い也。」とあるのも、この原理を云っている。陰陽はそれぞれ別個に独立して存在しているわけではなく、相互依存して大局的には循環して動いているわけである。同じく素問の《金匱真言論篇第四》には、「平旦（明方）より日中に至る。天之陽、陽中之陽也。日中より黄昏に至る。天之陽、陽中之陰也。合夜（日暮時）より鶏鳴（丑刻）に至る。天之陰、陰中之陰也。鶏鳴より平旦に至る。天之陰、陰中之陽也。故に人亦た之に應ず。夫れ人之陰陽を言うに、則ち外を陽と爲し、内を陰と爲す。人身之陰陽を言うに、則ち背を陽と爲し腹を陰と爲す。人身之藏府中の陰陽を言うに、則ち藏は陰と爲し府は陽と爲す。肝・心・脾・肺・腎の五藏を皆陰と爲し、胆・胃・大腸・小腸・膀胱・三焦の六府を皆陽と爲す。……」と、時間医学の基本原理が記述されたり、人体・臓腑への各要素の対応付けが述べられており、人の生命科学の理論体系の出発点ともいうべき内容を含んでいる。『黄帝内経』が世に出た時代よりかなり後世になって、その注釈書ともいうべき『類経』が、明代・張景岳によって編纂され（特にその続編ともいうべき『類経附翼』第二巻中の「医易」の章に易理の論述がある）更に後に（約二十年後の明末）それを簡潔化・明確化した注釈本『内経知要』が李中梓によって編纂されている。演題発表時には、これらを紹介しながら、“医易論”的な内容を述べる予定である。